

井尻秀憲 著

『現代アメリカ知識人と中国』

——知と情念のフロンティア——』

ミネルヴァ書房 1992年 4+258+12ページ

川井伸一

本書は著者が1983年から91年までに一貫した問題意識のもとに発表した論文を下敷きに新たに書き下ろしたものである。「あとがき」によれば、本書の問題意識は著者が1980年代前半にカリフォルニア大学バークレー校に留学中、「自己の中国研究の副産物としてアメリカの中国研究を涉猟しはじめたことに端を発し」、その後、「アメリカ知識人の一般的中国像の問題に関心を広げ、その像型と彼らの思考様式の特徴を相対化することによって、インテレクチュアル・ヒストリー（思想史）と知識社会学の学問領域を加味した一種の現代アメリカ知識人論を展開する衝動にかられていった」（255ページ）という。したがって、本書は「1970年代以降のアメリカの知的状況を、その中国像に照らして吟味するところの知識社会的試み」（8ページ）であり、また「政治意識論」の立場からの「現代アメリカ知識人論」でもあるとされる。

I 内容紹介

まず、本書の構成と内容を簡単に要約しておこう。序章「情念の中国、知の中国」では、本書の分析の前提と仮説が示される。まず分析の前提はアメリカ知識人の中国像とその時代背景との相互関係を明らかにすることに置かれる。その理由は社会内存在としての人間のイメージがその人間の実存する社会や時代環境から大きな拘束を受けていることにあり、特に時代環境として「覇権国家」アメリカの「自民族中心主義」や「文化的覇権」が重要な意味を持つとされ、その文脈から「知と権力」、つまりアメリカ知識人の中国像と戦後アメリカの「覇権」的地位との結びつきや相互関係に注目するのである。これを前提に2つの仮説を提

示している。すなわち、第1に、アメリカ知識人の中国像には中国に対するセンチメンタルな「心情主義」や「情念」に根ざした「中国イメージの重さ」があり、それは彼らの中国像の変化に関わりなく一貫して存在し、「通時的伝統」となっていること。第2に、アメリカ知識人の中国像は中国の現実そのものというより、「中国という鏡」にその時のアメリカ国内の状況や自らの価値観を映し出した「ミラーイメージ」（鏡のなかの自己像）であって、彼らはその「鏡のなかの自己像」に一喜一憂する「性癖」があることである。

第1章「開かれた『革命中国』への共感——1970年代前半——」では、1970年代前半のアメリカ知識人の中国像が総じて、西側世界にも開かれた「革命中国」に対する大きな共感を示しており、具体的には「潑刺として目的意識に満ち、徳の高い」中国人大衆、徳治主義に基づく中国指導者への尊敬、社会的平等への礼賛、高い経済発展への評価などに示されたという。これらの中国像は多分に心情的であり中国の現実から大きく遊離していたが、同時に現代アメリカ知識人の「疎外感」と反権力、ベトナム戦争の挫折感、「アメリカ帝国主義」とそれを支えた「沈黙の世代」への反逆およびポルノ、ドラッグ、暴力などのアメリカ社会の病理現象などの国内状況を投影したものであった。そして彼らの中国像には、自国の病理現象や「悪」を解消しうるユートピアを中国に求めて、自国への批判基準を中国には適応しない「二重基準」があったという。

第2章「共感から侮蔑へ——1970年代末～1980年代初期——」では、1970年代末から80年代初期のアメリカ知識人の中国像がそれまでの中国像の反動として、中国社会の病理や恥部を暴露する失望とシニシズムに満ちた偶像破壊的な中国イメージへと変化したことが示される。それはまさに「共感から侮蔑へ」のイメージ変化であった。こうしたなかで1980年代初めにアメリカの中国学界のなかに従来の中国研究の視座と方法を強く批判し、その反省のもとに新たな「パラダイム」を模索する動きが現われた。この新たな動きとして著者は3つの中国研究書、すなわちT・A・メッツガー (Metzger) とR・H・マイヤース (Myers) の著作、L・W・パイ (Pye) の著作、C・ジョンソン (Johnson) の著作をそれぞれ検討する。もとより、こうした反省

にたつクールな中国像の形成はかつての過度に美化された「中国神話」を打破する点で評価されるものの、同時に上述の方法的批判が主としてアメリカの保守主義的な中国研究者を代表する声として現われ、またジャーナリズム世界での中国論もアメリカ社会の保守化現象（「新保守主義」の台頭）および米中関係の現状と関連していたという。しかも、「共感から侮蔑へ」の中国イメージの極端な転換にもかかわらず、アメリカ知識人の中国に対する「感情的ロマンティズム」は変化しなかったとされる。

第3章「『改革・開放中国』への期待——1980年代中葉——」では、1980年代半ば以降のアメリカ知識人の中国像が「改革・開放中国」への楽観的期待の表明へと再び変化したことが示される。代表的な中国研究者の論文として検討されるのは、タン・ツォウ(Tang Tsou), M・オクセンバーグ(Oksenberg)とR・ブッシュ(Bush), D・S・ザゴリア(Zagoria), A・D・バーネット(Barnett)の各論文である。著者はこの4つの論文に共通に見られる問題点として2つを指摘する。ひとつは、毛沢東以後の中国政治変化を強調し、鄧小平の改革と近代化政策に多大の評価と期待を寄せていることで、そこには「全体主義」より「権威主義」を良しとするアメリカ的イデオロギーに根ざしたアメリカ知識人の「期待願望」が反映されているという。もうひとつは、鄧小平をはじめとする中国の指導者が概して「プラグマティスト」であり、中国社会がいまや「プラグマティズム」により全面的におおわれ、「脱イデオロギー時代」を迎えたとの評価であり、それは、中国がより「予測可能」で「合理的な」政治社会に移行しつつある、あるいは「そうあってほしい」と期待するアメリカ知識人の「プラグマティック」な思考様式の裏返しであって、そこには中国の改革の意図と将来の結果とを直結させ、同一視しがちな「プラグマティズム」の楽観主義的思い入れが潜んでいたのだという。

第4章「中国外交をいかに認識すべきか」では、1980年代の米中関係の展開とアメリカ知識人の中国論との関係を考察し、前者が後者に対して少なからず影響を与えており、前者の変化に応じて後者も変化したことを説いている。同時に、米中軍事協力についての

アメリカの支配的見解（A・D・バーネット等に代表される）はアメリカ人の「希望的観測と楽観的期待」に基づいていたし、1982年の中国の「独立自主」外交への路線転換と中国ナショナリズムの「復権」についてのM・オクセンバーグらの見解も、中国の外交政策決定過程がアメリカなど西側諸国のそれに近似したものになったとの自己の希望的観測に基づく楽観的主張であったとされる。米中関係をめぐる対中イメージは米中関係の現実直接影响到を受けて変化する「表層レベル」と多種多様な中国イメージの混在であり、長期間持続する「基層レベル」とに分けて論じられている。

第5章「天安門事件の衝撃——1989年以後——」では、1980年代後半のアメリカ知識人の対中イメージにおいて支配的であった「楽観主義」が89年の天安門事件の衝撃によって崩壊し、冷厳な現実直面して「失望と落胆」に取って代わったことが指摘され、そして天安門事件が2つの視角から説明されたことが検討される。すなわち、ひとつは、事件を中国の歴史的伝統や政治文化あるいは近現代史の発展パターンのなかに位置づけてみるもので、この視角は事件の中国的特徴を理解する上で有効ではあるが、新たな変動のモメントを極小化する欠点をもつ。もうひとつは、事件を「変わりゆく中国」のなかで発生した「前例のない」出来事として見るもので、それは10年の改革時代における政治経済社会の変化要因に注目する。しかし、事件の背景として「市民」の台頭を強調しすぎる（O・シェル〔Schell〕は「中国が自分たちと同じようになっている」とするアメリカ知識人の期待感の裏返しであり、中国全土の現実から遊離しかねない危険性をはらんでいるとする。

第6章「天安門『大虐殺』報道にみる虚と実」では、天安門事件と「大虐殺」をめぐるアメリカのマスコミ報道（主に活字メディア）やルポルタージュが検討され、その特徴として「民主化要求」運動の主体であった学生への「共感」が圧倒的であったことが指摘される。しかし、活字メディアに見られるアメリカ知識人の理想の対象が「アメリカ的価値としての民主主義を実現する学生」であったとすれば、彼らは、それが中国の「権威主義的伝統と政治文化」によって拒絶されてしまうことにあまりにも無自覚であって、そうした

中国学生への帰依は中国の現実から遊離した「自己陶醉」にすぎず、あまりにも「ナイーブ」であったという。

第7章「ホワイトハウスの周辺」では、天安門事件以後のアメリカ外交の主要なアクターであるホワイトハウスと議会における中国論が検討される。ホワイトハウスの対中政策では、「中国の戦略的重要性」が引き続き強調され、それは人権問題よりも中国の「安定」こそが自国の死活に関わるとしてきたアメリカの「現実主義的」中国政策の「惰性」の反映であるが、その政策の基調には中国への現実主義とセンチメンタリズム（中国への想い入れ）とが合体した「現実主義者のロマンス」というべきものがあつた。しかしながら、政権担当者は自らの「現実的政策」が「中国への想い入れ」という「ロマンス」に流されていることには「いたって無自覚」であつたという。

終章「中国像の再検証——知識人と中国——」において、序章で提起した2つの仮説が「検証」され、アメリカ知識人の対中国イメージにおける「変わらぬ思考様式」が主張される。

II コメント

以上かなり詳しく内容を紹介したが、本書は大変興味深くまた知的刺激に富んだ本である。

アメリカの現代中国研究に対し従来から関心はもちつつも、踏み込んで勉強してこなかった評者にとって、本書はまず1970年代以降のアメリカの現代中国研究の動向を窺い知る格好の手引き書である。著者も「あとがき」にあるように、アメリカの現代中国研究の手引き書としての性格を本書にもたせており、それはきわめて数多くのアメリカの中国研究文献を参照し、引用していることによく示されている。研究の手引き書として見ても、本書は研究業績の単なる網羅的な紹介ではなくて、著者の分析枠組に即して主要な研究業績、特に研究方法論に関する論文を重点的に取り上げて要点を整理しコメントしており、この点は一般の読者にとっても大いに参考になろう。もとより、本書の主要なねらいはアメリカの現代中国研究の手引き書を提供することにあるわけではない。

本書のねらいはアメリカ知識人の中国イメージ（中国像）について認識構造論的視角から検討し特徴づけることにあるが、評者にはその議論が大変興味深く感じられた。本書は議論を進めるにあたって興味深い仮説を設定している。その仮説はすでに紹介したとおりだが、評者の理解に基づき敢えて言い換えれば次のようになる。すなわち、アメリカ知識人の中国イメージは、その「基層レベル」においては「重い存在としての中国」への一貫した心理的こだわりがあり、それは自己の価値基準に基づいて中国の「進歩」を「期待」する「変わらぬ思考様式」であり、このレベルのイメージは時代環境の変化を越えて「通時的伝統」となっている。他方、イメージの「表層レベル」においての中国像はその時々アメリカの国内状況という自身の姿を映し出した「ミラーイメージ」であり、それは国内状況や米中関係の変化に応じて絶えず変化する、というものである。そしてこの仮説がそのまま本書の結論ともなっているのだが、そこにいくつかの本書の特徴・意義を見いだすことができる。

第1に、この仮説を現代アメリカ知識人、特に中国研究者の中国像に即して検証しようとしたこと、こうした知的作業は類書があまりなく、とりわけ日本の中国学界では従来ほとんど検討されてこなかっただけに大きな意味がある。

第2に、本書の仮説を支える2つの論点は「ミラーイメージ」論と「重い存在としての中国」という「変わらぬ思考様式」論であるが、本書は単にこの2つの論点（この論点自体は本書にもあるように別段新しいものではない）を検証しようとするにとどまらず、さらにこの2つの論点を構造的に関連させ、たとえばイメージの「基層レベル」と「表層レベル」との区別および両者の関係についての記述に見られるように、現代アメリカ知識人の中国像の構造分析にまで踏み込もうとしている点で、ひとつの新たな方向を開拓している。

第3に、本書の仮説の枠組は、中国イメージにおける知的理性的側面よりも心情的側面を強調しており、論述の過程でも幾度となく中国イメージにおける心情的性格が強調されている。したがって、本書は現代アメリカ知識人の中国イメージ形成における心情的契機

の大きさと心情的性格の強さを検証している点に特徴があり、著者の意気込みも強く感じられる。本書の副題にある「知と情念」に即して言えば、「知の中国」の構築というアメリカ知識人の知的試みのなかにも常に「情念の中国」が厳として大きく作用していたことが主張されるのである。その意味で本書はアメリカ知識人の中国認識における非合理性を究明するものとなっている。

第4に、本書はアメリカ知識人の中国イメージ（「表層レベル」の）形成を規定する要因として特にアメリカの国内環境や彼らの自己像を重視しており、それ自体「ミラーイメージ」論に基づく主張であると思われるが、著者はそれ以外の規定要因にも言及している。すなわち、米中関係の状況、中国自体の変化、特に中国の文化外交（統一戦線工作とロビー活動）などである。さらには「基層レベル」のイメージの影響も指摘されている。またそれらの要因の変化に応じて中国イメージ（「表層レベル」）も大きく変化した過程がダイナミックに描かれている。つまり、本書はアメリカ知識人の中国イメージの形成要因と変動過程の分析書としても興味深い。

このように本書はいろいろな意味で注目され、その分野の新たな研究業績として高く評価されるべきであろう。また当初は「中国研究の副産物」であったとはいえ、一貫した問題意識のもとにこのような力作としてまとめられた著者の努力には敬服する。

ところで、本書にも検討すべき問題がないわけではない。2つの点を指摘したい。

第1に、本書の仮説ないし分析枠組の論理的関連の問題についてである。本書の2つの仮説命題は構造的に関連したものとして把握されているが、その論理的関係が必ずしも明らかではないように思われる。つまり、中国イメージの基層としての「心情主義」「情念」に基づく「変わらぬ思考様式」とイメージの表層として時代環境によって絶えず変化する「ミラーイメージ」がどのように論理的に関係しているのかよくわからないのである。「ミラーイメージ」が時代環境に応じて変化するとはよく説明されているが、そのことと「変わらぬ思考様式」とは矛盾しないのか。「変わらぬ思考様式」が基本にありながら、にもかかわらず、

表層の「ミラーイメージ」がしばしば変化してしまうということは後者が前者と実際にはあまり関係ないからなのか。両者の論理的関係についての説明があまりないので、こうした疑問はそのまま残ったままである。本書がイメージの基層と表層との関係について言及していないわけではないが（たとえば150ページ）、その説明にはとまどうばかりである。なぜなら、そこではイメージの基層の変化が表層イメージに影響を与えることがありうると語られているからである。しかし、イメージの基層は「通時的伝統」として「変わらない」ものではなかったか。もしイメージの基層が一定の「心理環境」のもとで変化しようとする、そのことと「変わらぬ思考様式」という仮説とは論理的にどう結びつくのであろうか。また、もしイメージの基層が変化する「心理環境」があるとすれば、それはいったい具体的にはどのようなものなのか。

評者の推察では、2つの仮説は基本的には同質の性格をもち、したがって基本的には同じものとみなすことができるのではなからうか。すなわち、いずれの仮説も、自己社会（アメリカ）の価値基準や理念・理想を中国に投影して見ている点で同質であると考えられることはできないだろうか。時代環境への対応に差がでるのは、歴史的社会的に共有された基本的な価値や理念は持続的で長期間にわたりあまり変化しにくいのに対して、より世俗的で個別的な価値や理念は、時代環境の変化に応じて比較的变化しやすいからと考えるのである。したがって、観察主体がもつ価値・理念のレベルの相違によって、ミラーイメージとしての中国像はより持続的であったり、より可変的であったりする。このように考えることができるとすれば、2つの仮説を別個に提起する必要は必ずしもなく、しかも論理的脈絡ももっとすっきりしたものになったのではなからうか。

第2に、仮説の検証作業の問題について。本書の仮説設定そのものがアメリカ知識人の中国イメージにおける情念的性格を主張するものであり、したがって本書はその情念的性格を検証することに努力を集中させている。それはたとえば、アメリカ知識人の中国像における「楽観主義」「心情主義」「感情的ロマンティズム」的傾向への繰り返される批判的検討のなか

にはっきり現われている。それはまた、天安門事件の「民主化要求」運動を担った学生への「共感」を示したアメリカ知識人の反応について、本書が「そうした中国の学生への帰依は」「中国の現実から遊離した自己陶醉にすぎなかった」と断じていることにも見てとれる。したがって本書では中国イメージにおける情念的性格が強く印象づけられ、その印象はあまりにも強烈である。

アメリカ知識人の中国像における「楽観主義」、「心情主義」、「感情的ロマンティズム」的傾向の存在については数多くの知識人の見解を通してよく検証しているが、本書の仮説の検証作業でやや気がかりなのは、このような「心情主義」、「感情的ロマンティズム」が強く現われるのはなぜなのかという点について、結局のところ、アメリカ知識人の「抗しがたい性癖」、さらには「知的伝統」に帰せられていることである。しかしながら、その「抗しがたい性癖」や「知的伝統」に還元してアメリカ知識人の中国像における「心情主義」的性格を説明するのは説得的とは思われない。そこにはある意味で仮説を説明するのに仮説をもってす

るようなところがあるからである。

そのためであろうか、本書においてはアメリカ知識人の中国像形成における知的葛藤があまり伝わってこない。著者自身も恐らく意識されていたであろうが、アメリカ知識人の中国像における知的要素と情念的要素との緊張関係こそ検討するに値するものと思われる。なぜなら、彼らの中国像は「心情主義」に基づく単なる「神話」にすぎないのではなく、同時に理性に基づく知的営みに基づいていたことも事実であるとすれば、それは知的要素と情念的要素との緊張ないし弛緩の関係のあり方に大きく関わってくると考えられるからである。本書の副題である「知と情念のフロンティア」はまさに知的要素と情念的要素との動的関係の究明を通して見いだされるのではなかろうか。

以上、本書の課題を指摘したが、もとより本書が多くの人に読まれるべき価値ある研究書であることは言うまでもない。今後は、著者が本書のような問題意識から現代日本知識人と中国像に関する本格的研究をもにされることを大いに期待したい。

(愛知大学助教授)